

4 果 樹

| | |
|-------------------|-----|
| 果樹の土づくりと施肥法 | 289 |
| 施肥基準 | |
| なし | 292 |
| くり | 298 |
| 早生温州 | 299 |
| 普通温州 | 300 |
| なつみかん | 301 |
| ゆず | 302 |
| ぶどう | 303 |
| うめ | 308 |
| もも | 309 |
| びわ | 310 |
| かき | 312 |
| キウイフルーツ | 314 |
| いちじく | 315 |
| ブルーベリー | 316 |

果樹の土づくりと施肥法

果樹には多くの種類があるが、ここでは主要果樹であるなし、くり、温州みかん、ぶどう、びわ及びかきについて述べる。

(1) なし

火山灰土のなし園においては、細根は60cm程度の深さまで分布しているが、好適な深さは最低でも60～70cmであり、理想的には100cmが必要である。また、土壌の適正なpHは、5.5～6前後の微酸性である。しかしながら、スピードスプレーヤーなどの機械の踏圧により表層10～20cm程度の土壌がち密化して通気性と透水性が悪化している園が多い。表層部の理化学性を良好な状態に維持するため、必要に応じて中耕を行うとともに有機物資材や熔りん、石灰質資材などを施用するとよい。有機物資材としては完熟した家畜ふん堆肥、稲わらなどを用い、収穫後に施用する。せん定枝などの未熟木質有機物の施用は避ける。粘質でち密な土壌には根がほとんど分布しないので、深耕は品質の向上にも効果がある。

初期生育は、主として樹体内に蓄えられた炭水化物、窒素、りん酸、加里及びその他の養分によって賄われているから、前年の秋の栄養状態を良くしておくことが重要である。なし栽培では、品質向上のため収穫期前の肥効が制限されるので、収穫後の秋肥の施用が極めて重要であり、一般的に基肥(11月下旬～12月上旬)と秋肥(9月上旬～下旬)に重点を置き、4月中旬～6月中旬に追肥を施用する。

養分の中で栽培的に最も影響が現れやすいのは、窒素である。りん酸は、欠乏が表面化することは少ない。加里は、窒素とともに要求量の多い養分であるが、本県における園土壌の実態調査ではりん酸・加里過剰の傾向がみられるので、土壌診断を実施した上で施用することが望ましい。

(2) くり

くりは、深根性の作物であり、好適な土壌の有効土層は60cm以上であるが、理想的には100cm以上の深さが必要である。また、地力依存度が高く、樹の生育にとって腐植と窒素が特に重要であるため、堆肥、稲わらなどの有機物の施用が必要である。

一般に酸性土壌では生育するが、アルカリ性土壌では良好な生育をしないといわれている。しかし、pH5.0以下の強酸性土壌では障害が発生するので、土壌pHを5.0～5.5に矯正しなければならない。

窒素は、樹勢に応じた施用が必要であり、1～3年生で3kg/10a、4～5年生で8kg/10a、8～10年生で15kg/10a、11年生以上の成木では20kg/10a程度が適量である。

りん酸については、吸収力が極めて強いので、施用は基肥にとどめておく。また、加里は、窒素と同量程度の施用が適当と考えられる。

なお、堆肥、家畜ふん尿などの施用により土壌中の窒素、りん酸、加里含量が高くなっている場合はそれぞれ減量する。

(3) 温州みかん

みかんは、土壌の化学性よりもより改善の困難な物理性に大きく影響される。根群の深さは40cm以上で、有効根群域の深さは60cm以上もあるので、排水と通気性の良いほ場ほど根が張って品質が良くなる。1～2月に、平坦地では樹間を60cm程度深耕して溝を作り、階段畑では樹ごとにたこつぼを1～2か所掘る。溝やたこつぼは、堆肥やせん定枝とともに石灰や熔りん等を土とよく混和したもので埋め戻す。さらに、稲わらが入手できる場合は、樹冠の外周付近に敷く。雑草草生とする場合は、年に2～3回草刈りを行い、刈り草は敷草として稲わらと同様に用いる。

収量と品質に最も大きく影響する養分は、窒素である。窒素の過剰は、枝葉を徒長させて過繁茂にするほか着花数や結実数を減少させ果皮を粗くし味を淡泊にする。施用量は、露地で27kg/10aを基準とする。りん酸は吸収量が少ないので、施用量は窒素より少なくてもよい。加里は、結実による収奪量が多いが、欠乏をみることはあまりない。

施肥は、一般に春肥、夏肥及び秋肥を施用する。春肥は、全面に散布して中耕する。夏肥の窒素は、遅効きすると品質の低下を招くので注意する。秋肥は、施用が遅過ぎると樹勢が十分に回復しないので、早生種では収穫後なるべく早く、晩生種では地温の低下しない11月中旬ころまでに施用する。

みかんは、土壌中のほう素含量が1mg/L以上になると過剰症を起こすことがある。

(4) ぶどう

火山灰土の園においては、根群は深さ50～60cmまで密に分布する。しかし、機械化が進んだ園のなかには、機械の踏圧によって土壌がち密化されて物理性が悪化している所がある。このような園では、土壌の肥沃度を高めても根群は発達しないので、落葉後の休眠期に深耕を行うとともに、堆肥、稲わら、麦わらなどを投入して土壌を改良する。

ぶどうは、萌芽期から新梢伸長期にかけては主として根の貯蔵養分に依存して生育している。施肥は、基肥(11月上旬～12月中旬)と秋肥(9月上旬～下旬)に重点を置き、5～6月に追肥を行う。このうち秋肥は、根及び樹全体の貯蔵養分量を増加させるため特に重要である。

りん酸は肥効が現れにくい。加里は、土壌中の含量が多いので、堆肥等を施用している園では控えめとする。

(5) びわ

びわは、地上部に比べて根部が小さく、特に細根が少ない。そのため、土壌改良を行い、排水を良くして、根張りを良くすることが大切である。園は急傾斜地にあることが多く有機物の搬入に労力がかかるため、有機物が不足している場合が多い。そこで、堆肥、稲わら等を施用するとともに、草刈り後には刈り草を樹冠下に敷いて、有機物の園内での供給を図る。せん定枝などの未熟木質有機物の施用は避ける。耕うんは、秋肥施用後にやや深めに行う。

好適な土壌酸度はpH6.0～6.5である。県内の園は酸性の強い所が多いが、このような園では肥効が劣り、樹の生育が悪く果実の品質が低下する。したがって、土壌の酸性が強い場合は酸性肥料の施用は避ける。主な養分のなかでは、窒素の影響が最も大きい。窒素の施用量が多過ぎると、枝葉が過繁茂となって果実の肥大が悪くなるほか、果皮の着色遅れや果肉が硬くなる。施用量が少なすぎると、樹勢の低下につながるため、適量を施用するように努める。そのほか石灰の吸収量も多いので、土壌診断を実施した上で、施用量は過不足のないようにする。

露地栽培では9月中旬に基肥、1月上旬と6月上旬(収穫後)に追肥を行い、ハウス栽培では7月中旬に基肥、11月下旬と5月中旬(収穫後)に追肥を行う。それぞれ1回目の追肥の施用時期が遅れると着色も遅れるので、適期に施用するようにする。収穫後の追肥も結果枝の充実のために遅れないようにする。

(6) かき

かきは、深根性であり、根群の伸長に好適な土壌の深さは70～100cmであるが、かき園の土壌は、一般に有機物含量が少なく養分的にやや乏しく物理性が不良になりやすい。特に第三系の粘質の強い園では、中・下層がかなり硬く通気性と透水性に欠けているので、根は多くの場合40～50cmにとどまっている。このような園では、深耕を行うとともに有機物や土壌改良資材を投入して中・下

層の理化学性を改善し、細根の密度を高めて樹勢の維持と生産の安定を図ることが必要である。

かきは、発芽して芽を伸ばし果実を着けるのに必要な養分を主として前年に枝幹や根に蓄えた養分で賄う。前年に結実過多となった樹では、貯蔵養分が少ないために着花数が減少して、いわゆる隔年結果性を示す。このような樹では、適切な肥培管理を行っても、貯蔵養分が回復し生産が安定するまで長期間を要する。

施肥は、一般に基肥(11月上旬～12月上旬)、春肥(3月上旬～下旬)及び秋肥(9月下旬～10月下旬)を行う。秋肥は、品種の早晩によって異なりおおむね果実の着色始期～収穫始期頃に施用するが、樹勢を回復し翌春の初期生長に必要な養分を補充する時期に当たるので、生産安定のため特に重要である。

なし (幸水、成木園)

- 1 対象地域 県内全域
 2 土 壌 火山灰土
 3 栽植密度 15~20 本/10a
 4 目標収量 3,000kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月旬 | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-----|------|---|-----|--------------|-----|---------------|-------|------|-----------------|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | | | | ● | ● | | | ● | | ● | ● |
| 主要作業名 | | | 棚しぼり | 摘蓄・草刈り 受粉 芽かき・草刈り 芽摘果・追肥 予備摘果・追肥 本摘果 草刈り・追肥 | 誘引 | 仕上げ摘果 草刈り | 収穫 | 追肥(秋肥) 草刈り | 防災網除去 | 土壌改良 | せん定 基肥・中耕・深耕 | |

6 施肥基準

(kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|-----------------|----|-----|----|-----------------|
| 基肥 | 11月下旬 ~12月上旬 | 11 | 8 | 7 | 高度化成、有機配合、有機質肥料 |
| 追肥 | 5月上旬 | 3 | — | — | 単肥 |
| | 6月上旬 | 3 | — | — | 単肥 |
| | 9月上旬 (秋肥) | 6 | 12 | 5 | 高度化成 |
| 計 | | 23 | 20 | 12 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32~44 ページ、47~51 ページ及び 417~424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63~78 ページ及び 401~404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20~24 ページ、52~62 ページ、400~404 ページ及び 409~416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37~40 ページ及び 450~459 ページ参照)。
- (6) 土壌 pH を 5.5~6.0 に矯正する。
- (7) 肥料は、全量全面施用する。ただし、堆肥、有機物、りん酸質肥料、石灰などを溝または穴に施用する場合は、土とよく混和して埋め戻す。
- (8) 時期別施用配分は、窒素を主体とする。りん酸及び加里は、年間施用量が施肥基準量にほぼ一致する範囲内で適宜増減してよい。

なし (幸水、成木園)

- 1 対象地域 上総地域、安房地域
 2 土 壌 第三系粘質土
 3 栽植密度 15~20 本/10a
 4 目標収量 3,000kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月旬 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-----|------|--------|--------|---------|---------|-----|--------|-----|-----|-------|----|--------|-----|-------|------|-----------------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | | | | | | |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | | | | ● | ● | | | ● | | ● | ● | | | | | | |
| 主要作業名 | | | 棚しぼり | 摘蓄・草刈り | 受粉・草刈り | 芽かき・草刈り | 予備摘果・追肥 | 本摘果 | 草刈り・追肥 | 誘引 | 草刈り | 仕上げ摘果 | 収穫 | 追肥(秋肥) | 草刈り | 防災網除去 | 土壌改良 | せん定 基肥・中耕・深耕 |

6 施肥基準

(kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|-----------------|----|-----|----|-----------------|
| 基肥 | 11月下旬 ~12月上旬 | 11 | 6 | 7 | 高度化成、有機配合、有機質肥料 |
| 追肥 | 5月上旬 | 3 | — | — | 単肥 |
| | 6月上旬 | 3 | — | — | 単肥 |
| | 9月上旬 (秋肥) | 6 | 4 | 5 | 高度化成 |
| 計 | | 23 | 10 | 12 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32~44 ページ、47~51 ページ及び 417~424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63~78 ページ及び 401~404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20~24 ページ、52~62 ページ、400~404 ページ及び 409~416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37~40 ページ及び 450~459 ページ参照)。
- (6) 土壌 pH を 5.5~6.0 に矯正する。
- (7) 肥料は、全量全面施用する。ただし、堆肥、有機物、りん酸質肥料、石灰などを溝または穴に施用する場合は、土とよく混和して埋め戻す。
- (8) 時期別施用配分は、窒素を主体とする。りん酸及び加里は、年間施用量が施肥基準量にほぼ一致する範囲内で適宜増減してよい。

なし (幸水、成木園)

- 1 対象地域 千葉中央地域、九十九里地域
 2 土 壌 海成砂質土、河成壤質土
 3 栽植密度 15～20本/10a
 4 目標収量 3,000kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月旬 | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-----|------|---------------------------|------------------|----------|-----------|-----|------------|-------|------|-----------------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | | | ● | | ● | | | ● | | ● | ● |
| 主要作業名 | | | 棚しぼり | 摘果 受粉 追肥・芽かき 防災網 | 芽かき 摘果 本摘果 | 追肥 誘引 | 仕上げ 収穫 | 収穫 | 追肥 (秋肥) | 防災網除去 | 土壌改良 | せん定 基肥・中耕・深耕 |

6 施肥基準 (kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|------------------------------|---------------|---------------|-------------|--------------------------------|
| 基肥 | 11月下旬 ～12月上旬 | 7.5 | 4.5 | 6 | 低度化成、有機配合、有機質肥料 |
| | 4月下旬 6月中旬 9月上旬 (秋肥) | 5 5 7.5 | 3 3 4.5 | 3 3 5 | 低度化成、有機配合 低度化成、有機配合 低度化成 |
| 計 | | 25 | 15 | 17 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32～44 ページ、47～51 ページ及び 417～424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63～78 ページ及び 401～404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び 409～416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37～40 ページ及び 450～459 ページ参照)。
- (6) 土壌 pH を 5.5～6.0 に矯正する。
- (7) 肥料は、全量全面施用する。ただし、堆肥、有機物、りん酸質肥料、石灰などを溝または穴に施用する場合は、土とよく混和して埋め戻す。
- (8) 時期別施用配分は、窒素を主体とする。りん酸及び加里は、年間施用量が施肥基準量にほぼ一致する範囲内で適宜増減してよい。

なし (豊水、成木園)

- 1 対象地域 県内全域
 2 土 壌 火山灰土
 3 栽植密度 18~31本/10a
 4 目標収量 3,500~4,000kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月旬 | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-----|------|--------|----------------------------|---------|---------|-----|-----|-------|------|---------------------|-------|------|-----------------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | | | |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | | | | | | | | ● | | ● | ● | | | |
| 主要作業名 | | | 棚しぼり | 摘蓄・草刈り | 芽かき・草刈り 予備摘果 芽かき・草刈り | 本摘果・草刈り | 本摘果・草刈り | 誘引 | 草刈り | 仕上げ摘果 | 収穫始め | 追肥(秋肥) 収穫終わり・草刈り | 防災網除去 | 土壌改良 | せん定 基肥・中耕・深耕 |

6 施肥基準

(kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|-----------------|----|-----|----|-----------------|
| 基肥 | 11月下旬 ~12月上旬 | 12 | 12 | 7 | 高度化成、有機配合、有機質肥料 |
| 追肥 | 9月上旬 (秋肥) | 8 | 8 | 5 | 高度化成 |
| 計 | | 20 | 20 | 12 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32~44 ページ、47~51 ページ及び 417~424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63~78 ページ及び 401~404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20~24 ページ、52~62 ページ、400~404 ページ及び 409~416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37~40 ページ及び 450~459 ページ参照)。
- (6) 土壌 pH を 5.5~6.0 に矯正する。
- (7) 肥料は、全量全面施用する。ただし、堆肥、有機物、りん酸質肥料、石灰などを溝または穴に施用する場合は、土とよく混和して埋め戻す。
- (8) 時期別施用配分は、窒素を主体とする。りん酸及び加里は、年間施用量が施肥基準量にほぼ一致する範囲内で適宜増減してよい。

なし (豊水、成木園)

- 1 対象地域 上総地域、安房地域
 2 土 壌 第三系粘質土
 3 栽植密度 18～31本/10a
 4 目標収量 3,500～4,000kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月旬 | | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-----|------|--------|-----------------------------------|---------|-----|-----|-------|------|------------------------------|------|-----------------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | |
| | | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | | | | | | | | ● | | ● | ● | |
| 主要作業名 | | | 棚しぼり | 摘蓄・草刈り | 芽かき・草刈り 予備摘果 芽かき・草刈り 防災網 | 本摘果・草刈り | 誘引 | 草刈り | 仕上げ摘果 | 収穫始め | 追肥(秋肥) 収穫終わり・草刈り 防災網除去 | 土壌改良 | せん定 基肥・中耕・深耕 |

6 施肥基準

(kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|-----------------|----|-----|----|-----------------|
| 基肥 | 11月下旬 ～12月上旬 | 12 | 6 | 7 | 高度化成、有機配合、有機質肥料 |
| 追肥 | 9月上旬 (秋肥) | 8 | 4 | 5 | 低度化成 |
| 計 | | 20 | 10 | 12 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32～44 ページ、47～51 ページ及び 417～424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63～78 ページ及び 401～404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び 409～416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37～40 ページ及び 450～459 ページ参照)。
- (6) 土壌 pH を 5.5～6.0 に矯正する。
- (7) 肥料は、全量全面施用する。ただし、堆肥、有機物、りん酸質肥料、石灰などを溝または穴に施用する場合は、土とよく混和して埋め戻す。
- (8) 時期別施用配分は、窒素を主体とする。りん酸及び加里は、年間施用量が施肥基準量にほぼ一致する範囲内で適宜増減してよい。

なし (豊水、成木園)

- 1 対象地域 千葉中央地域、九十九里地域
 2 土 壌 海成砂質土、河成壤質土
 3 栽植密度 18~31本/10a
 4 目標収量 3,500~4,000kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月旬 | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-----|------|--|-----|-----------------|-----|-------|------|------------------------------|------|-----------------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | | | ● | | ● | | | ● | | ● | ● |
| 主要作業名 | | | 棚しぼり | 摘果 受粉 芽かき・追肥 芽かき 予備摘果 防災網 | | 本摘果 追肥 誘引 | 敷わら | 仕上げ摘果 | 収穫始め | 収穫終わり・草刈り 追肥(秋肥) 防災網除去 | 土壌改良 | せん定 基肥・中耕・深耕 |

6 施肥基準

(kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|-----------------|-----|-----|----|-----------------|
| 基肥 | 11月下旬 ~12月上旬 | 7.5 | 4.5 | 6 | 低度化成、有機配合、有機質肥料 |
| 追肥 | 4月下旬 | 5 | 3 | 3 | 低度化成、有機配合 |
| | 6月中旬 | 5 | 3 | 3 | 低度化成、有機配合 |
| | 9月上旬 (秋肥) | 7.5 | 4.5 | 5 | 低度化成 |
| 計 | | 25 | 15 | 17 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32~44 ページ、47~51 ページ及び 417~424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63~78 ページ及び 401~404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20~24 ページ、52~62 ページ、400~404 ページ及び 409~416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37~40 ページ及び 450~459 ページ参照)。
- (6) 土壌 pH を 5.5~6.0 に矯正する。
- (7) 肥料は、全量全面施用する。ただし、堆肥、有機物、りん酸質肥料、石灰などを溝または穴に施用する場合は、土とよく混和して埋め戻す。
- (8) 時期別施用配分は、窒素を主体とする。りん酸及び加里は、年間施用量が施肥基準量にほぼ一致する範囲内で適宜増減してよい。

く り (成 木 園)

- 1 対象地域 県内全域
 2 土 壌 火山灰土
 3 栽植密度 40~60本/10a (超低樹高仕立て長母枝育成法)
 4 目標収量 320kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月旬 | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|------------|-----|-----|-----|-----|-------------------|-----------------|------------|-----------|-----|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | ● | | | | | ● | | ● | | | |
| 主要作業名 | | 基せん 肥ん定 | | | 草刈り | | 草刈り 追肥 (実肥) | 草刈り 収穫 始め | 追肥 (礼肥) | 収穫 終わり | | せん定 |

6 施肥基準

(kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|----------------------------------|----|-----|----|---|
| 基 肥 | 11月下旬～ 2月上旬 (休眠期) | 10 | 15 | 8 | ・有機質肥料を中心に当年施用量の50% を施用する。 ・低度化成は、有機質肥料の不足分を 施用する。 |
| 追 肥 | 7月上旬 (実肥) | 6 | — | 6 | 低度化成 |
| | 9月上旬～ 10月下旬 (収穫直後) (礼肥) | 4 | — | 4 | 低度化成 |
| 計 | | 20 | 15 | 18 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (2) 土壌 pH を 5.0～5.5 に矯正する。
- (3) 基肥は樹冠下に環状に埋め込みし、追肥 (実肥及び礼肥) は全面施用する。
- (4) 豊作であった場合は、礼肥施用量を 20% 程度増やす。

早 生 温 州 (成 木 園)

- 1 対 象 地 域 安房地域
 2 土 壌 第三系粘質土
 3 栽 植 密 度 160 本/10a(4 倍計画密植)
 4 目 標 収 量 4,000kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 月旬 | 1 | | 2 | | 3 | | 4 | | 5 | | 6 | | 7 | | 8 | | 9 | | 10 | | 11 | | 12 | |
|-------|---|------|-----|--------|---|---|---|-----|---|--------|-----|-----|-------|---|---|---|---|---|----|------|--------|-------|----|---|
| | 上 | 中 | 下 | 上 | 中 | 下 | 上 | 中 | 下 | 上 | 中 | 下 | 上 | 中 | 下 | 上 | 中 | 下 | 上 | 中 | 下 | 上 | 中 | 下 |
| 栽培型 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 施 肥 | | ● | | ● | | | | | | ● | | | | | | | | | | | ● | | | |
| 主要作業名 | | 土壌改良 | せん定 | 基肥(春肥) | | | | 草刈り | | 追肥(夏肥) | 粗摘果 | 草刈り | 仕上げ摘果 | | | | | | | 収穫始め | 追肥(秋肥) | 収穫終わり | | |

6 施 肥 基 準

(kg/10a)

| 施 用 時 期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対 応 |
|---------|---------------|----|-----|----|------|
| 基 肥 | 3月下旬 (春肥) | 16 | 13 | 9 | 有機配合 |
| 追 肥 | 6月上旬 (夏肥) | 5 | 7 | 7 | 有機配合 |
| | 11月上旬 (秋肥) | 6 | 4 | 6 | 有機配合 |
| 計 | | 27 | 24 | 22 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32~44 ページ、47~51 ページ及び 417~424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63~78 ページ及び 401~404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20~24 ページ、52~62 ページ、400~404 ページ及び 409~416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37~40 ページ及び 450~459 ページ参照)。
- (6) 土壌の pH を 6.0~6.5 に矯正する。石灰は、2 月または 9 月に施用し土とよく混和する。
- (7) 土壌改良資材または有機物の深層施用に努める。2 月に、溝またはたこつぼを掘り、堆肥、有機物、りん酸質肥料、石灰などを土と混和して埋め戻す。

普通温州(成木園)

- 1 対象地域 安房地域
 2 土 壌 第三系粘質土
 3 栽植密度 111本/10a(4倍計画密植)
 4 目標収量 4,000kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月旬 | | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|------|---------------|-----|-----|-----------------|------------|-------|-----|-----|------|----------------|-------------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | |
| 主要作業名 | | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | ● | ● | | | ● | | | | | ● | | |
| 主要作業名 | | 土壌改良 | 基肥(春肥) せん定 | | 草刈り | 追肥(夏肥) 摘果剤散布 | 粗摘果 草刈り | 仕上げ摘果 | | 草刈り | 樹上選果 | 追肥(秋肥) 収穫始め | 貯蔵 収穫終わり |

6 施肥基準

(kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対 応 |
|------|---------------|----|-----|----|------|
| 基 肥 | 3月下旬 (春肥) | 16 | 13 | 9 | 有機配合 |
| 追 肥 | 6月上旬 (夏肥) | 5 | 5 | 9 | 有機配合 |
| | 11月中旬 (秋肥) | 6 | 4 | 6 | 有機配合 |
| 計 | | 27 | 22 | 24 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する(32~44ページ、47~51ページ及び417~424ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する(14ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する(63~78ページ及び401~404ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する(20~24ページ、52~62ページ、400~404ページ及び409~416ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する(37~40ページ及び450~459ページ参照)。
- (6) 土壌のpHを6.0~6.5に矯正する。石灰は、2月または9月に施用し土とよく混和する。
- (7) 土壌改良資材または有機物の深層施用に努める。2月に、溝またはたこつぼを掘り、堆肥、有機物、りん酸質肥料、石灰などを土とよく混和して埋め戻す。

な つ み か ん (成 木 園)

- 1 対 象 地 域 安房地域
 2 土 壌 第三系粘質土
 3 栽 植 密 度 111 本/10a(4 倍計画密植)
 4 目 標 収 量 4,500kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|----|------------------|-----------------------------------|------------------|-----|---|--------------------|----------------------------|--------|-------------|--------------------|-----|-----|
| 栽培型 | 月旬 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| | | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| | | | | | | | | | | | | | |
| 施 肥 | | ● | ● | | | | ● | | | ● | | | |
| 主 要 作 業 名 | | 土 壌 改 良 | 基 肥 (春 肥) せ ん 定 | 収 穫 始 め | | 収 穫 終 わ り ・ 草 刈 り | 追 肥 (夏 肥) | 草 刈 り ・ 摘 果 | 摘 果 | 草 刈 り | 追 肥 (秋 肥) | | |

6 施 肥 基 準

(kg/10a)

| 施 用 時 期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対 応 |
|---------|---------------|----|-----|----|-----------|
| 基 肥 | 3 月中旬 (春肥) | 12 | 10 | 7 | 有機配合 |
| 追 肥 | 6 月下旬 (夏肥) | 6 | 4 | 6 | 高度化成、有機配合 |
| | 9 月下旬 (秋肥) | 12 | 8 | 12 | 有機配合 |
| 計 | | 30 | 22 | 25 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32～44 ページ、47～51 ページ及び 417～424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63～78 ページ及び 401～404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び 409～416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37～40 ページ及び 450～459 ページ参照)。
- (6) 土壌の pH を 6.0～6.5 に矯正する。石灰は、2 月または 9 月に施用し土とよく混和する。
- (7) 土壌改良資材または有機物の深層施用に努める。2 月に、溝またはたこつぼを掘り、堆肥、有機物、りん酸質肥料、石灰などを土とよく混和して埋め戻す。

ゆず (成木園)

- 1 対象地域 県内地域
 2 土 壌 全土壌
 3 栽植密度 160本/10a(4倍計画密植)
 4 目標収量 2,000kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月旬 | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|------|---------------|-----|----------|--------|----------|------|----------------|-----|-------|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | ● | ● | | | ● | | | ● | | | |
| 主要作業名 | | 土壌改良 | 基肥(春肥) せん定 | | 草刈り・とげ切り | 追肥(夏肥) | 草刈り・とげ切り | 収穫始め | 追肥(秋肥) ・草刈り | | 収穫終わり | 貯蔵 |

6 施肥基準 (kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|--------------|----|-----|----|------|
| 基肥 | 3月中旬 (春肥) | 8 | 4 | 4 | 有機配合 |
| 追肥 | 6月中旬 (夏肥) | 4 | 5 | 5 | 高度化成 |
| | 9月中旬 (秋肥) | 4 | 5 | 5 | 高度化成 |
| 計 | | 16 | 14 | 14 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32~44 ページ、47~51 ページ及び 417~424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63~78 ページ及び 401~404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20~24 ページ、52~62 ページ、400~404 ページ及び 409~416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37~40 ページ及び 450~459 ページ参照)。
- (6) 土壌の pH を 6.0~6.5 に矯正する。石灰は、2月または9月に施用し土とよく混和する。
- (7) 土壌改良資材または有機物の深層施用に努める。2月に、溝またはたこつぼを掘り、堆肥、有機物、りん酸質肥料、石灰などを土とよく混和して埋め戻す。

ぶ ど う (巨峰、成木園)

- 1 対象地域 県内全域
 2 土 壌 火山灰土
 3 栽植密度 4～6本/10a
 4 目標収量 1,500kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月旬 | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-----|------|-----|---------------|---------------------|-----|------|---------------|-----|------|--------------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | | | | | ● | | | ● | | ● | ● |
| 主要作業名 | せん定 | | 棚しぼり | | 摘房整形 ・新梢誘引 | 追肥 芽かき ・仕上げ摘房 | | 収穫始め | 収穫終わり (秋肥) | | 土壌改良 | 基肥・中耕 ・深耕 |

6 施肥基準

(kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|----------------------|--------|--------|--------|--------------|
| 基肥 | 11月下旬 ～12月中旬 | 2 | 8 | 4 | 単肥・低度化成・有機配合 |
| 追肥 | 6月中旬 9月下旬 (秋肥) | 2 2 | — 2 | 4 2 | NK化成 低度化成 |
| 計 | | 6 | 10 | 10 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32～44 ページ、47～51 ページ及び 417～424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63～78 ページ及び 401～404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び 409～416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37～40 ページ及び 450～459 ページ参照)。
- (6) 土壌 pH を 6.0～6.5 に矯正する。
- (7) 肥料は、全量全面施用する。ただし、堆肥、有機物、りん酸質肥料、石灰などを溝または穴に施用する場合は、土とよく混和して埋め戻す。
- (8) 1 回目の追肥の窒素施用量は、新梢の伸び具合をみて決める。伸びの良い園では、施用量を減らす。
- (9) 時期別施用配分は、窒素を主体とする。りん酸及び加里は、年間施用量が施肥基準量にほぼ一致する範囲内で適宜増減してよい。

ぶ ど う (巨峰、成木園)

- 1 対象地域 九十九里地域
 2 土 壌 海成砂質土
 3 栽植密度 8～10本/10a
 4 目標収量 1,500kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月旬 | | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-----|------|-----|-----------|-----|-----------|-----|------|--------|-------|------|----------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | |
| | | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | | | | | ● | ● | | ● | | ● | ● | |
| 主要作業名 | せん定 | | 棚しぼり | | 摘房整形・新梢誘引 | 追肥 | 芽かき・仕上げ摘房 | 追肥 | 収穫始め | 追肥(秋肥) | 収穫終わり | 土壌改良 | 基肥・中耕・深耕 |

6 施肥基準 (kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|-----------------|----|-----|----|--------------|
| 基肥 | 11月下旬 ～12月中旬 | 3 | 5 | 4 | 単肥・低度化成・有機配合 |
| 追肥 | 6月中旬 | 3 | 4 | 2 | 低度化成 |
| | 7月下旬 | 1 | — | 2 | NK化成 |
| | 9月下旬 (秋肥) | 3 | — | 3 | NK化成 |
| 計 | | 10 | 9 | 11 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32～44 ページ、47～51 ページ及び417～424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63～78 ページ及び401～404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び409～416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37～40 ページ及び450～459 ページ参照)。
- (6) 土壌pHを6.0～6.5に矯正する。
- (7) 肥料は、全量全面施用する。ただし、堆肥、有機物、りん酸質肥料、石灰などを溝または穴に施用する場合は、土とよく混和して埋め戻す。
- (8) 1回目の追肥の窒素施用量は、新梢の伸び具合をみて決める。伸びの良い園では、施用量を減らす。
- (9) 時期別施用配分は、窒素を主体とする。りん酸及び加里は、年間施用量が施肥基準量にほぼ一致する範囲内で適宜増減してよい。

ぶ ど う (巨峰、ハウス栽培)

- 1 対象地域 県内全域
 2 土 壌 火山灰土
 3 栽植密度 7~8本/10a
 4 目標収量 1,400kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月旬 | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-----|-------------------|-----|----------------|-----------------|-----|------|-------|-----|-------------------|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| ハウス栽培 | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | | | | | ● | | | | | ● | ● |
| 主要作業名 | せん定 | | 棚しぼり ハウスビニール被覆 | | 房整形 摘房・新梢誘引 | 追肥 芽かき・仕上げ摘房 | | 収穫始め | 収穫終わり | | 土壌改良 ハウスビニール除去 | 基肥 |

6 施肥基準 (kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|-----------------|----|-----|----|--------------|
| 基肥 | 11月下旬 ~12月中旬 | 4 | 10 | 8 | 単肥・低度化成・有機配合 |
| 追肥 | 6月中旬 | 2 | — | 2 | NK化成 |
| 計 | | 6 | 10 | 10 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32~44 ページ、47~51 ページ及び 417~424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63~78 ページ及び 401~404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20~24 ページ、52~62 ページ、400~404 ページ及び 409~416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37~40 ページ及び 450~459 ページ参照)。
- (6) pHが低下している場合は、苦土石灰を施用し pH6.0~6.5 に矯正を行う。
- (7) 肥料は、全量全面施用する。ただし、堆肥、有機物、りん酸質肥料、石灰などを溝または穴に施用する場合は、土とよく混和して埋め戻す。
- (8) 追肥の窒素施用量は、新梢の伸び具合をみて決める。伸びの良い園では、施用量を減らす。
- (9) 時期別施用配分は、窒素を主体とする。りん酸及び加里は、年間施用量が施肥基準量にほぼ一致する範囲内で適宜増減してよい。

ぶ ど う (デラウェア、成木園)

- 1 対象地域 県内全域
 2 土 壌 火山灰土
 3 栽植密度 8～13本/10a
 4 目標収量 1,500kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月旬 | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-----|------|-----|---------------------------|---------|-----|---------------|--------|-----|------|----------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | | | | ● | | | | ● | | ● | ● |
| 主要作業名 | せん定 | | 棚しぼり | | 追肥・摘房・ジベレリン処理 芽かき・新梢誘引 | ジベレリン処理 | | 収穫始め 収穫終わり | 追肥(秋肥) | | 土壌改良 | 基肥・中耕・深耕 |

6 施肥基準 (kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|-----------------|----|-----|----|---------|
| 基肥 | 11月下旬 ～12月中旬 | 6 | 10 | 6 | 単肥・有機配合 |
| 追肥 | 5月中旬 | 3 | — | 3 | NK化成 |
| | 9月上旬 (秋肥) | 3 | 3 | 3 | 低度化成 |
| 計 | | 12 | 13 | 12 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する(32～44ページ、47～51ページ及び417～424ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する(14ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する(63～78ページ及び401～404ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する(20～24ページ、52～62ページ、400～404ページ及び409～416ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する(37～40ページ及び450～459ページ参照)。
- (6) 土壌pHを6.0～6.5に矯正する。
- (7) 肥料は、全量全面施用する。ただし、堆肥、有機物、りん酸質肥料、石灰などを溝または穴に施用する場合は、土とよく混和して埋め戻す。
- (8) 時期別施用配分は、窒素を主体とする。りん酸及び加里は、年間施用量が施肥基準量にほぼ一致する範囲内で適宜増減してよい。

ぶ ど う (デラウェア、成木園)

- 1 対象地域 九十九里地域
 2 土 壌 海成砂質土
 3 栽植密度 15～20 本/10a
 4 目標収量 1,500kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月 旬 | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-----|------|-----|---------------|------------|-----|---------------|--------|-----|------|----------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | | | | ● | ● | | | ● | | ● | ● |
| 主要作業名 | せん定 | | 棚しぼり | | 追肥・摘房・ジベレリン処理 | 追肥・ジベレリン処理 | | 収穫始め 収穫終わり | 追肥(秋肥) | | 土壌改良 | 基肥・中耕・深耕 |

6 施肥基準

(kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|-----------------|----|-----|----|-----------|
| 基 肥 | 11月下旬 ～12月中旬 | 6 | 5 | 6 | 有機配合 |
| | 5月中旬 | 5 | 5 | 5 | 低度化成、有機配合 |
| 追 肥 | 6月中旬 | 1 | — | 4 | 単肥 |
| | 9月上旬 (秋肥) | 6 | 2 | 3 | 低度化成 |
| 計 | | 18 | 12 | 18 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32～44 ページ、47～51 ページ及び 417～424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63～78 ページ及び 401～404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び 409～416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37～40 ページ及び 450～459 ページ参照)。
- (6) 土壌 pH を 6.0～6.5 に矯正する。
- (7) 肥料は、全量全面施用する。ただし、堆肥、有機物、りん酸質肥料、石灰などを溝または穴に施用する場合は、土とよく混和して埋め戻す。
- (8) 時期別施用配分は、窒素を主体とする。りん酸及び加里は、年間施用量が施肥基準量にほぼ一致する範囲内で適宜増減してよい。

う め (成木園)

- 1 対象地域 県内全域
 2 土 壌 全土壌
 3 栽植密度 18～33本/10a
 4 目標収量 1,200～1,500kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月旬 | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-----|-----|-----|---------------------|-----------------|-----|-----|---------------|-----|-------------|-----------------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | | | | | ● | | | ● | | ● | ● |
| 主要作業名 | | | | 草刈り | 草刈り 収穫開始 ・ねん枝 | 追肥(夏肥) 収穫終わり | 草刈り | | 追肥(秋肥) 草刈り | | 土壌改良 せん定 | 基肥・中耕・深耕 せん定 |

6 施肥基準 (kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|--------------|----|-----|----|-----------|
| 基肥 | 12月上旬 | 8 | 7 | 9 | 高度化成・有機配合 |
| 追肥 | 6月下旬 (夏肥) | 3 | 2 | 3 | 低度化成 |
| | 9月上旬 (秋肥) | 3 | 3 | 3 | 低度化成 |
| 計 | | 14 | 12 | 15 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する(32～44ページ、47～51ページ及び417～424ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する(14ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する(63～78ページ及び401～404ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する(20～24ページ、52～62ページ、400～404ページ及び409～416ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する(37～40ページ及び450～459ページ参照)。
- (6) 土壌pHを5.5～6.0に矯正する。
- (7) 時期別施用配分は、窒素を主体とする。りん酸及び加里は、年間施用量が施肥基準量にほぼ一致する範囲内で適宜増減してよい。

も も (成木園)

- 1 対象地域 千葉中央地域、九十九里地域
 2 土 壌 海成砂質土
 3 栽植密度 21~28本/10a
 4 目標収量 1,500kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月旬 | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-----|-----|--------|---------------|-----|------|-----|-----------------|-----|-----|------|----------|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | | |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | | |
| | | | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | | | | | | | ● | | | ● | ● | | |
| 主要作業名 | せん定 | | 摘蕾 | 受粉・草刈り | 摘果 芽かき・草刈り | 摘果 | 収穫始め | 草刈り | 収穫終わり 追肥(礼肥) | 草刈り | | 土壌改良 | 基肥・中耕・深耕 | せん定 |

6 施肥基準 (kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|-----------------|----|-----|----|------|
| 基肥 | 11月下旬 ~12月中旬 | 12 | 8 | 10 | 有機配合 |
| 追肥 | 8月上旬 (礼肥) | 5 | 2 | 4 | 低度化成 |
| 計 | | 17 | 10 | 14 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32~44 ページ、47~51 ページ及び 417~424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63~78 ページ及び 401~404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20~24 ページ、52~62 ページ、400~404 ページ及び 409~416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37~40 ページ及び 450~459 ページ参照)。
- (6) 土壌の pH を 6.0~6.5 に矯正する。pH 調整資材投入等による土壌改良は、11 月上旬とする。
- (7) 肥料は、全量全面施用する。ただし、有機物及びりん酸質肥料は、溝または穴に施用してもよい。
- (8) 時期別施用配分は、窒素を主体とする。りん酸及び加里は、年間施用量が施肥基準量にほぼ一致する範囲内で適宜増減してよい。

び わ (成木園)

- 1 対象地域 安房地域
 2 土 壌 第三系粘質土
 3 栽植密度 28本/10a
 4 目標収量 1,200kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 月旬 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | |
|-------|--------|-----|------------|-----|-----|----------------|-------|-----|-----|---------------|-------|-------|----|
| 栽培型 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | |
| | | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | ● | | | | | ● | | | ● | | | | |
| 主要作業名 | 追肥(春肥) | | 摘果・防寒除去袋かけ | | 草刈り | 収穫始め 追肥(夏肥) | 収穫終わり | 草刈り | | せん定 追肥(秋肥) | 摘房・摘蕾 | 摘房・摘蕾 | 防寒 |

6 施肥基準

(kg/10a)

| | | 施用時期 | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|--------|----|----------|----|-----|----|------|
| 耕土の浅い園 | 基肥 | 9月中旬(秋肥) | 12 | 9 | 9 | 有機配合 |
| | 追肥 | 1月上旬(春肥) | 10 | 9 | 5 | 有機配合 |
| | | 6月上旬(夏肥) | 5 | 4 | 4 | 高度化成 |
| | 計 | | | 27 | 22 | 18 |
| 耕土の深い園 | 基肥 | 9月中旬(秋肥) | 11 | 9 | 7 | 有機配合 |
| | 追肥 | 1月上旬(春肥) | 7 | 8 | 3 | 有機配合 |
| | | 6月上旬(夏肥) | 5 | 3 | 3 | 高度化成 |
| | 計 | | | 23 | 20 | 13 |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する(32~44ページ、47~51ページ及び417~424ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する(14ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する(63~78ページ及び401~404ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する(20~24ページ、52~62ページ、400~404ページ及び409~416ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する(37~40ページ及び450~459ページ参照)。
- (6) 土壌のpHを6.0~6.5に矯正する。石灰は、1月または9月の施肥の2週間前に施用し、その後耕うんする。
- (7) 施肥後は、軽く耕うんする。ただし、夏肥施用後は、その必要はない。
- (8) 有機物を積極的に投入する。深耕による深層施用も有効であるが、この場合は必ず完熟堆肥を用いる。

び わ (ハウス栽培)

- 1 対象地域 安房地域
 2 土 壌 第三系粘質土
 3 栽植密度 28～40 本/10a
 4 目標収量 1,800kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月旬 | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|--------|-----|-----------|----------|-----|---------------------|-----|-----|-------|---------------|--------------------------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| ハウス栽培 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | | | | ● | | ● | | | | ● ● | |
| 主要作業名 | | 摘果・袋かけ | | 収穫始め・暖房終了 | 収穫終わり・追肥 | せん定 | 基肥・灌水終了 ハウスビニル除去 | | せん定 | 摘房・摘蕾 | 土壌改良 追肥・中耕 | 暖房開始 灌水開始 ハウスビニル被覆 |

6 施肥基準 (kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|-------|----|-----|----|------|
| 基肥 | 7月中旬 | 8 | 6 | 4 | 有機配合 |
| 追肥 | 11月下旬 | 4 | 3 | 2 | 有機配合 |
| | 5月中旬 | 4 | 3 | 3 | 高度化成 |
| 計 | | 16 | 12 | 9 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32～44 ページ、47～51 ページ及び 417～424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63～78 ページ及び 401～404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び 409～416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37～40 ページ及び 450～459 ページ参照)。
- (6) 土壌の pH を 6.0～6.5 に矯正する。
- (7) 5 月の追肥には、即効性肥料を用いる。

か き (西村早生、成木園)

- 1 対象地域 県内全域
 2 土 壌 火山灰土、第三系粘質土
 3 栽植密度 20～30本/10a
 4 目標収量 2,000kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月旬 | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-----|--------|-----|-----|-----|-----|--------|-----|-----|-----|------|-------|--------|------------|------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | | | | |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | | ● | | | | | | | ● | ● | | | | | |
| 主要作業名 | | せん定 | 追肥(春肥) | 草刈り | 摘受粉 | 草刈り | 摘果 | 摘果・敷わら | 灌水 | 摘果 | 草刈り | 収穫始め | 収穫終わり | 追肥(秋肥) | 落葉処理・基肥・深耕 | 粗皮削り |

6 施肥基準

(kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|-----------------|----|-----|----|------------|
| 基肥 | 11月下旬 ～12月上旬 | 10 | 10 | 10 | 低度化成、有機質肥料 |
| 追肥 | 3月上旬 (春肥) | 2 | 2 | 2 | 低度化成 |
| | 10月中下旬 (秋肥) | 3 | — | 3 | NK化成 |
| 計 | | 15 | 12 | 15 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する(32～44ページ、47～51ページ及び417～424ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する(14ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する(63～78ページ及び401～404ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する(20～24ページ、52～62ページ、400～404ページ及び409～416ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する(37～40ページ及び450～459ページ参照)。
- (6) 土壌のpHを6.0～6.5に矯正する。
- (7) 肥料は全量全面施用する。ただし、堆肥、有機物、りん酸質肥料、石灰などを溝または穴に施用する場合は、土とよく混和して埋め戻す。
- (8) 時期別施用配分は、窒素を主体とする。りん酸及び加里は、年間施用量が施肥基準量にほぼ一致する範囲内で適宜増減してよい。
- (9) 樹勢が劣る場合は、6月下旬～7月上旬に窒素及び加里をそれぞれ2kg/10a程度施用する。

か き (松本早生・富有、成木園)

- 1 対象地域 県内全域
 2 土 壌 火山灰土、第三系粘質土
 3 栽植密度 20～30本/10a
 4 目標収量 2,500kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月旬 | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-----|--------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----------------|-------|--------------------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | | ● | | | | | | | ● | | ● |
| 主要作業名 | | せん定 | 追肥(春肥) | 草刈り | 摘受粉 | 草刈り | 敷わら | 灌水 | 草刈り | 収穫始め 追肥(秋肥) | 収穫終わり | 落葉処理・基肥・深耕 粗皮削り |

6 施肥基準

(kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|-----------------|----|-----|----|------|
| 基肥 | 11月下旬 ～12月上旬 | 12 | 12 | 12 | 有機配合 |
| 追肥 | 3月上旬 (春肥) | 2 | 2 | 2 | 低度化成 |
| | 10月下旬 (秋肥) | 3 | — | 3 | NK化成 |
| 計 | | 17 | 14 | 17 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32～44 ページ、47～51 ページ及び 417～424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63～78 ページ及び 401～404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び 409～416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37～40 ページ及び 450～459 ページ参照)。
- (6) 土壌の pH を 6.0～6.5 に矯正する。
- (7) 肥料は全量全面施用する。ただし、堆肥、有機物、りん酸質肥料、石灰などを溝または穴に施用する場合は、土とよく混和して埋め戻す。
- (8) 時期別施用配分は、窒素を主体とする。りん酸及び加里は、年間施用量が施肥基準量にほぼ一致する範囲内で適宜増減してよい。
- (9) 樹勢が劣る場合は、6月下旬～7月上旬に窒素及び加里をそれぞれ 2kg/10a 程度施用する。

キウイフルーツ（ハイワード、成木園）

- 1 対象地域 県内全域
 2 土 壌 火山灰土、第三系粘質土
 3 栽植密度 28～33本/10a
 4 目標収量 3,000kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月旬 | | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-----|-----|-----|------------------------|--------------|--------|-----|--------|---------------|------|-------------|------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | |
| 栽培型 | | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | | | | ● | | | | ● | | ● | | |
| 主要作業名 | せん定 | | | 草刈り | 誘引・芽かき 受粉 追肥(夏肥) | 摘果 誘引・草刈り | 芽かき・摘心 | 草刈り | せん定・摘心 | 追肥(秋肥) 草刈り | 収穫始め | 基肥 収穫終わり | 粗皮削り |

6 施肥基準

(kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|--------------|----|-----|----|------|
| 基肥 | 11月下旬 | 10 | 10 | 10 | 有機配合 |
| 追肥 | 5月下旬 (夏肥) | 6 | 6 | 5 | 低度化成 |
| | 9月中旬 (秋肥) | 4 | — | 4 | NK化成 |
| 計 | | 20 | 16 | 19 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する（32～44 ページ、47～51 ページ及び 417～424 ページ参照）。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する（14 ページ参照）。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する（63～78 ページ及び 401～404 ページ参照）。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する（20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び 409～416 ページ参照）。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する（37～40 ページ及び 450～459 ページ参照）。
- (6) 土壌の pH を 6.0～6.5 に矯正する。
- (7) 肥料は全量全面施用する。ただし、堆肥、有機物、りん酸質肥料、石灰などを溝または穴に施用する場合は、土とよく混和して埋め戻す。
- (8) 花腐細菌病が多発する園または樹勢が強すぎる園では、基肥の施肥を控える。

いちじく (成木園)

- 1 対象地域 県内全域
 2 土 壌 全土壌
 3 栽植密度 100～125 本/10a
 4 目標収量 3,000kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月旬 | | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|------|-----|-----|-----------|------------|---------|----------------------|-----|-----|-----------|----------|----------|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | |
| | | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | | | | | ● | | ● | | | ●● | | |
| 主要作業名 | | 防寒除去 | せん定 | | 敷芽 きわら | 追肥 (夏肥) | 誘引 芯 | 追肥 (初秋肥) ・収穫始め | | | 収穫 終わり | 土基 改良 | 防深 寒耕 |

6 施肥基準 (kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|---------------|----|-----|----|------------|
| 基肥 | 11月下旬 | 10 | 9 | 7 | 有機配合・有機質肥料 |
| 追肥 | 6月下旬 (夏肥) | 3 | 2 | 4 | 有機配合 |
| | 8月中旬 (初秋肥) | 2 | 2 | 3 | 有機配合 |
| 計 | | 15 | 13 | 14 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する (32～44 ページ、47～51 ページ及び 417～424 ページ参照)。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する (14 ページ参照)。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する (63～78 ページ及び 401～404 ページ参照)。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する (20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び 409～416 ページ参照)。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する (37～40 ページ及び 450～459 ページ参照)。
- (6) 土壌 pH を 6.5～7.5 に矯正する。
- (7) 追肥は敷わらの上から全面施用し、施用後灌水を行う。
- (8) 生育が悪い場合は、窒素 1～2kg/10a を施用する。

ブルーベリー（ハイブッシュ）

- 1 対象地域 県内全域
 2 土 壌 全土壌
 3 栽植密度 180 樹/10a（約 1.8m×3.0m 間隔）
 4 目標収量 800～1,000kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月旬 | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-----|------------|-------------------------------|---------------------|----------|-----|-----------|------------|-----|-----|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | | ● | | ● | | | ● | | | | |
| 主要作業名 | | せん定 | 基肥 (春肥) | 受粉 (ミツバチの巣箱を10a に一箱セット) | 追肥 (夏肥) ネット張り | 収穫 始め | | 収穫 終わり | 追肥 (秋肥) | | マルチ | せん定 |

6 施肥基準 (kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|--------------|-----|-----|-----|------------|
| 基肥 | 3月中旬 (春肥) | 4.5 | 4.5 | 4.5 | 有機配合・有機質肥料 |
| 追肥 | 5月中旬 (夏肥) | 2.2 | 2.2 | 2.2 | 有機配合 |
| | 8月下旬 (秋肥) | 2.2 | 2.2 | 2.2 | 有機配合 |
| 計 | | 8.9 | 8.9 | 8.9 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する（32～44 ページ、47～51 ページ及び 417～424 ページ参照）。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する（14 ページ参照）。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する（63～78 ページ及び 401～404 ページ参照）。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する（20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び 409～416 ページ参照）。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する（37～40 ページ及び 450～459 ページ参照）。
- (6) 土壌 pH を 4.3～4.8 に矯正する。土壌 pH が高い場合には、硫黄華（粉）100kg/10a を施用する。
- (7) 全園をバークやオガクズで厚さ 10cm 位に覆われるよう管理する。
- (8) 肥料は、全量全面に施用し、軽く耕うんする。

ブルーベリー（ラビットアイ）

- 1 対象地域 県内全域
 2 土 壌 全土壌
 3 栽植密度 100 樹/10a（約 2.5m×3.0m 間隔）
 4 目標収量 800～1,000kg/10a
 5 栽培型と主な作業

| 栽培型 | 月 旬 | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|-----|--------|-----------------------|-----|-----------------|------|-----|-----------------|-----|-----|-----|
| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 | 上中下 |
| | | | | | | | | | | | | |
| 施肥 | | | ● | | | ● | | | ● | | | |
| 主要作業名 | | せん定 | 基肥（春肥） | 受粉（ミツバチの巣箱を10aに1箱セット） | | ネット張り 追肥（夏肥） | 収穫始め | | 収穫終わり 追肥（秋肥） | | マルチ | せん定 |

6 施肥基準 (kg/10a)

| 施用時期 | | 窒素 | りん酸 | 加里 | 対応 |
|------|----------|-----|-----|-----|------------|
| 基肥 | 3月中旬（春肥） | 4.5 | 4.5 | 4.5 | 有機配合・有機質肥料 |
| 追肥 | 6月上旬（夏肥） | 2.2 | 2.2 | 2.2 | 高度化成 |
| | 9月下旬（秋肥） | 2.2 | 2.2 | 2.2 | 高度化成 |
| 計 | | 8.9 | 8.9 | 8.9 | |

7 施用上の留意事項

- (1) 施肥の環境負荷を考慮する（32～44 ページ、47～51 ページ及び 417～424 ページ参照）。
- (2) 土壌診断や施用資材の検討に当たって各種パソコンシステムを活用する（14 ページ参照）。
- (3) 施肥量の算定に当たっては有機質資材の肥料成分を考慮する（63～78 ページ及び 401～404 ページ参照）。
- (4) 土壌診断に基づいて土壌の改善対策を実施する（20～24 ページ、52～62 ページ、400～404 ページ及び 409～416 ページ参照）。
- (5) 資材の施用に当たっては土壌への重金属蓄積等に注意する（37～40 ページ及び 450～459 ページ参照）。
- (6) 土壌 pH を 4.3～5.3 に矯正する。土壌 pH が高い場合には、硫黄華（粉）100kg/10a を施用する。
- (7) 全園をバークやオガクズで厚さ 10cm 位に覆われるよう管理する。
- (8) 肥料は、全量全面に施用し、軽く耕うんする。